

保育者をめざす学生の基礎学力と生活習慣 —— 文章表現に見える問題点を中心に ——

佐藤達全

Basic Scholarship and Habits of Life of the Students Aiming at Teachers of Nursery Schools or Kindergartens : View from the Problems Appearing in their Writing Expression

Tatsuzen Sato

Abstract

At the present time, everybody who wants to enter the university will be admitted, so these is more and more lowering in his or her scholarship. I, in charge of “Japanese Expression Practice” have noticed that many problems are latent in the sentences my students write. They are neither the wrong words nor the false substitute characters but more essential problems such as the way of looking at things or the way of thinking.

Therefore I have corrected the writing of the sentences again and again, guiding them to deepen their way of looking at things and that of thinking. Consequently it has been revealed that the students “aren’t able to write sentences” but they “haven’t tried to write (because they haven’t been guided adequately)” and “they haven’t tried to think the background of the things.” Moreover they haven’t acquired the fundamental learning habit, “to study repeatedly” as the background of the above mentioned.

On the other side, it has been pointed out that the learning habit and the learning desire are related to the habit of life. Accordingly I consider that the study guidance of the times when all can enter the university need not only to examine and improve the contents of teaching and the methods of teaching but also to guide at the same time the basic habit of living that was originally cultivated in domestic life.

Keywords : Sentence expression, Fundamental scholastic attainments, Learning habit, Basic habit of life, Learning desire

キーワード : 文章表現, 基礎学力, 学習習慣, 基本的生活習慣, 学習意欲

1. はじめに

大学生の学力低下が指摘されて久しいが、大学全入時代といわれる現在ではその傾向はますます

加速しているように感じられる。筆者は「国語表現演習」を担当していて、学生が書く文章には多くの問題が潜んでいることに気がついた。

それは、文章表現の間違い（誤字や当て字）の

ような表面的な問題にとどまらず、ものの見方や考え方といった大きな問題を含んでいるということである。そこで、学生にくり返し文章を書いて提出してもらい、それを添削することによって、保育者としてのものの見方や考え方を深めることを試みてきた。

その結果、半期の授業期間中にある程度の改善は見られたものの、根本的な解決にはつながらず、この方法の限界を感じざるを得なかった。その理由は、大学に入学するまでに身につけた知識や学習習慣を半年間で切り替えることは容易ではないからである。最近、小学校では「早寝早起き朝ごはん」を定着させようとしている。基本的な生活習慣が身についている児童は成績もよいという報告が出ていることから、改めて生活習慣に目が向けられるようになったのであろう。

平成19年4月24日に全国で実施された小中学生の学力テストの結果が同じ年の10月24日に公表されたが、そこでも基本的な生活習慣と学力が相関していると指摘されている^(註1)。

筆者の場合は対象者がそれほど多くないから断言することはできないが、国語表現演習の作文で、くり返し同じ間違いを指摘される学生は遅刻が多かったり返事や挨拶がしっかりできなかつたり提出物が期限に遅れたりするケースが多いという共通点が見られることに気がついた。

こうしたことから、基礎的な学力を身につけるためには、まず学習習慣を確立することが必要であるとの結論に至った。これまでは「大学生だから」と言って、生活面にはあまり目を向けることがなかったのであるが、大学全入時代を迎えたこれからは大学生に対しても基本的な生活習慣の指導が求められるのではないだろうか^(註2)。

2. 文章表現の実態

保育科の学生が書く文章に問題があると感じたのは7年ほど前のことである^(註3)。そこで、「国語表現演習」の授業で学生が書いた文章を読んでいて

気づいた事柄を「保育科学生の文章表現力について」という報告にまとめた^(註4)。

そこで、取り上げたのは、次のような問題点である。

- ①誤字や当て字が多い。
- ②主語と述語の関係が正しく対応しておらず、文章の構成がおかしい。
- ③助詞の使い方がおかしく、正しい日本語の文章になっていない。
- ④話し言葉のまま書かれている。
- ⑤「見れる」「食べれる」はもとよりのこと、「違く」「なにげに」など〈最新のはやり言葉〉のような表現がしばしば登場する。
- ⑥説明文を書く場合、主語と述語が正しく対応していない場合が少なくない^(註5)。
- ⑦語彙が乏しいためであろうか、同じ形容詞や副詞を何度も繰り返し使っている。
- ⑧代名詞を用いて表現することがほとんどないので、具体的なものや人の名前などを何度も繰り返して書いている。
- ⑨文章が長いため、「ので」や「が」といった助詞を用いてだらだらと続けるケースが多い。そのため、100字～150字も続くような長い文章を時々見かける。
- ⑩推量表現（ではないでしょうか）がほとんど見られない。
- ⑪800字程度の文章を書くときに、一つも段落を区切ることがない学生も見られる。
- ⑫文末に「思います」や「です」といった同じ表現を4回も5回も続ける。
- ⑬文章表現力ではないが、テキストがすらすら読めない学生も少なくない。常用漢字すら完全に覚えていないことと、アクセントがおかしいために他の意味を受けとめられかねない読み方をする学生が目立つ。

こうした状況のまま保育現場に出ると、保護者や先輩保育者から指摘を受けることが予想されるので、授業では常に次の二点を強調してきた。

①あやふやな漢字は辞書を引いて確かめてから書くようにすること。

②文章を書いたら必ず読み返して、間違いがないかどうか確認すること。

ところが、正しい文章の書き方をいくら説明しても、学生の書く文章にほとんど変化（改善）は見られなかった。

3. 問題の所在

(1) 文章表現上の問題

ところで、正しい文章表現ができないことがどうして問題なのであろうか。そこには二つの視点が考えられる。まず第一点は、文章表現そのものの問題である。保育者の仕事は乳幼児を保育することであるから、乳幼児と関わっていればよいと考えることは自然である。

①指導計画や保育記録の作成に関して

けれどもそれだけで仕事が終わるわけではない。乳幼児の望ましい発達を援助するためには、その身心の発達をふまえた適切な指導計画をたてる必要がある。また、保育活動を展開した後には、その結果を指導要録や児童票といった記録として残すことも保育者の重要な仕事になっている。いずれも文章として書かなければならないが、これらは勤務する園内でのことであるから、問題が対外的に広がることはない。

②保護者との関係において

さらに、乳幼児を保育するには保護者との連携が不可欠であるから、保育者は日常的に家庭との情報交換を行っている。園児の送迎時や電話でのやりとりの場合もあるが、連絡ノートや園だより・クラスだより等も活用されている。保育記録はともかくとして、こうした連絡ノートや園だよりは常に保護者が読むものである。要点を的確に表現したわかりやすい文章が求められることは言うまでもないが、正しい文章表現でなければならないことは当然であろう。それができないと、保護者の信頼を失うことにもなりかねない。

③実習指導において

新任の間は別として、いずれは実習生の指導にも携わるようになるであろう。その際には、実習日誌のコメントを書くことになる。その文章は実習生だけでなく、大学の実習指導担当者の目にも触れることになる。おかしな文章が多いと、指導能力そのものを問われかねない。

そのためであろうか、最近は実習を依頼したときに「実習日誌に毎日のコメントを書かなくてもよいのであれば引き受けます」という条件を付けられることもある。

(2) 文章が書けないことの本質的な問題

しかし、問題の本質はこれで終わったわけではない。第二点として、正しい文章表現ができないことには、もっと重大な問題が潜んでいることに目を向けなくてはならないであろう。このことについては以前、「文章表現から見た保育科学生の問題点 —表現の特徴と思考力の関係—」という拙論の中で、「学生が書いた文章の実態は基礎学力の低下の問題として見過ごせないことではあるが、こうした文章を見ていて保育科の学生にとってもっと深刻な問題があるように思われてならない」として

次の4点を指摘しておいた^(註6)。

- ①推量表現がほとんど用いられていないこと。
- ②代名詞で表現することがほとんどないこと。
- ③「楽しかったです」といった、小学生の作文に見られる表現がきわめて多いこと（「です」は体言や一部の助詞に接続する語）。
- ④「……できたらいいです」「……になったらいいです」といった他人事のような表現が非常に多いこと。

この中で、推量表現が用いられないことは、具体的な「もの」や「現象」には目を向けても、その奥にある本質を考えようとする意識がないことを意味しているから、乳幼児の心を読みとりながら

適切な働きかけをしなくてはならない保育者にとって問題であることを指摘した。また、文章の中にほとんど代名詞が用いられないことも、具体的な人や物のことしか意識できないという点で同様の問題を含んでいるのではないだろうか。

さらに、「楽しかったです」「うれしかったです」という小学生の作文に特有の表現が多いことは、学生の意識が小学生とそれほど変わらないのではないかという点を指摘した。

このようなことから、保育科学生の文章に見える特徴は保育者としての資質の問題につながり、単なる文章表現にとどまらずもっと重大な事柄を示唆していると言えるのではないだろうか。推量表現の欠落は周囲の状況を考える力の欠如であり、さらには問題意識を持って物事を考えようとする姿勢が欠落していることのあらわれとも言えるのではないだろうか。私たちはそれを問題にしなくてはならない。

このことに関連して、ここ数年、研究室における学生の行動で気になることが増えてきた。それは、一人の学生と話している時にその学生と親しい別の学生が研究室に入ってきた場合である。すると、初めの学生は私との会話を突然に中断して「〇〇！」と呼びかけて会話を始めてしまう。これは私に対して大変に失礼なことなのに、本人は全くその意識がない。啞然としてしまうことがしばしばである。

当の学生は「そういうことをしては失礼だ」という大人の感覚を全く持ち合わせていない。もちろん、話の内容に緊急性が全くないことは言うまでもない。もう1つ気になる点は、教師に対して敬語を使って話せない学生が増えてきたことである。以前から多少は見かけられたが、最近は「です」「ます」という丁寧語で話せないだけでなく、「先生なにしてるん」「先生、レポート忘れたんだけど、明日でいい」などと、いわゆる「タメ口」を聞く学生がいることに驚かされる。これらは、「楽しかったです」という小学生並みの文章を書

くことが意味する点、つまり学生の幼児性ということと無関係ではないであろう^(注7)。

4. 正しい文章が書けない原因はどこにあるか

ところで、学生の文章に間違いが多いことはどこに原因があるのだろうか。そのポイントは次の二点にあるように思える。

①正しい文章を書こうとする意欲が乏しい。

(学習習慣が身につけていない。ただし、これは後に触れるように生活習慣とも密接に関係していると思われる。また、文章を書くことの意味や必要性を十分に認識していない学生が少なくない)

②間違った文章を書いてもそれを指摘してもらう機会がなかった。

(こういった意見は、国語表現演習で添削指導を行っているときに、多くの学生から出された。また、小中学校時代の学習の動機づけが十分でなかった。文章を書く意味や目的を理解させるための指導がなされていない)

(1) 学習意欲(正しい文章を書こうとする意欲)の乏しさ

授業を担当していて次のようなことを感じるようになった。それは、多くの学生に共通しているのは「できない」のではなく「やろうとしない」から書けないということである。このことは、中学生のほとんどが高校に進学し、さらにその半数近くが大学に進学する現状ではやむを得ないことかもしれない。

しかし、保育者(幼児教育者)をめざすのであればそれを容認するわけにはいかない。わからないことをわかろうとする意欲やできないことをできるようにしようとする意欲が低いことを問題にしなくてはならない。このことに関して、次のような指摘がある。

「学ばない症候群：意欲ないまま大学・社会へ」

中学に入ったばかりなのに『もう勉強はあきらめた』『今さら追いつけない』と漏らす生徒が増えてきた。新入生に悩みを聞いて回る東京都内の公立中学校長（59）はここ数年の変化が気になって仕方がない。聞けば「算数が分からなくなったのは小学3年生ごろ」と返ってくる。「以前は一割にも満たなかったのに最近では2、3割に上る」と校長は言う。

「授業が分からない」→「面白くない」→「勉強嫌い」→「勉強拒否」。多くの子どもが今、この「負のスパイラル」に陥っている^(注8)。

さらに、

神奈川県教育委員会の調査では、県立高校二年生の51%が学校以外で全く勉強をせず、8割以上が一日1時間の勉強もしない^(注9)。

という実態も報告されている。

このことは、「大学進学者の5人に1人が高校三年の時に家でほとんど勉強せず、二人に一人は勉強時間が二時間以下」という結果を東大の研究グループが実施した全国調査で明らかにしたこととも関連する。さらに、同調査では、「勉強する層としない層とに二極化している」ことも指摘している^(注10)。

また、高校の二極化について、先の日経新聞では、「難関大学を目指して猛勉強する生徒は、以前の受験競争以上の少数激戦を強いられる」とも指摘している。

こうした報告を見ると、ほとんど勉強をしなくても卒業できる高校の教育のあり方が問題となることは当然であるが、先の調査を担当した東大の金子元久教授の「高校の学習内容が生徒の学習意欲に合致していないのではないか」という指摘にも目を向けなければならないであろう。

もちろん、学ぶ意欲が欠如していることは問題であり、大学全入時代と言われてはいるものの、勉強時間ゼロでも大学に入れることをどのようにとらえたらよいのであろうか。大学経営上からは定員を確保することは死活問題であるのだから、

推薦入試や指定校制やAO入試等、さまざまな入試制度が登場しているが、入り口だけでなく入学後の教育（一部の大学では入学前教育に取り組み始めている）のあり方を真剣に考えなくてはならない時代になったと言える。

しかし、この問題は簡単ではない。そもそも「学びたくない」のになぜ進学するのであろうかという問題から分析を始める必要がある。そして、その結果を大学における学習指導（生活指導を含めた）に活用しなくてはならない。高校の早期退学者は問題にされることもあるが、大学生のそれについては単位制等の進級の仕組みの違いなども関係するためか、あまり話題にされることはないようである。

まず、本人の意識はどうであろうか。大学全入時代と言われ、家庭の経済力も進学に耐えられる程度になっていることも背景にあり、そこに日本人の「横並び意識」（みんなが行くから）も加わって、われもわれもと大学に進学するのではないだろうか^(注11)。

しかし、決して少ないとはいえない費用をかけてもそれに見合った得るものがあるのだろうか。もしかすると、親に学費や生活費のほとんどを負担してもらっている学生の多くは、そこまでは考えていないのかもしれない。

次に、親の意識はどうであろう。

「自分が大学を出ていないからせめて子どもだけは大学を卒業させてやりたい」

「自分が高卒で苦勞したから子どもにはそのような苦勞を味わわせたくない」

「まわりが大学に行くのだから、人並みにさせてやりたい」

などと考える親は今でも少なくないであろう。

一方、高校教師の意識はどうなのか。少子化が進むなかで公立であれ私立であれ高校も経営努力が求められ、生徒募集にしのぎを削っている。スポーツに力を入れることもその一つで、野球やサッカーはその代表であるが、それだけで中学生

やその保護者の関心を引きつけるには十分とは言えない。以前は地域の「進学校」とそれ以外の高校とで大きな差があり、全体の大学進学率もそれほど高くはなかったために、この方法が通用したのだろうが、高校卒業生の半数が大学に進学するようになった現在は、大学進学の実績に関心が集中している。そのために、ほとんどの高校で特待生制度を設けたり特別な進学クラスを編成したりしての対応が行われ、進学の実績作りに懸命である。その結果、時には「勇み足」も見られる。

その象徴的なできごとが、全国的に発生した「世界史未履修問題」であり、さらには一部私立高校の大学合格者数（筆者注：入学者ではない）の水増し公表である。これは、高校側がセンター試験の結果がよかった特定の生徒の大学受験料を負担して数多くの大学を受験させ、その結果を生徒募集につなげようとの意図から行われたことであり、その背景には、大学側の受験生（入学生）を増やそうとの思惑からセンター試験の結果だけで受験できる大学・学部が多くなったという入試制度も背景になっている。

こうしたことは、高校も大学も経営のために学生生徒をいかに多く集めるかという点にばかり関心を集中させ、肝腎の「教育とは何か」「どのような卒業生を送り出すか」という本質的な議論が置き去りにされてしまった結果と言えるのではないだろうか。

この点に関しては、保育科の学生の場合は進学の目的は比較的明確である。それは、ほとんどの入学生が「保育者（幼稚園教諭・保育士）になりたい」と考えているからである。ただ残念なことに、幼児期の教育が人間形成の基礎作りとして重要であるにもかかわらず、保育という仕事の意義が必ずしも社会で十分に認識されているとは言えない現実がある。ともすると、保育は「子守り」「子どもと遊んでいればいい」と認識されることも少なくない。

そのため、誤解を恐れずに言うなら、いわゆる

「進学校」の生徒や成績の優秀な生徒が集まることはあまり期待できない。もちろん、保育の仕事は単に「知識を教える」ことが目的ではないから、偏差値だけで判断することは適切ではない。幼児期の教育・保育において保育者の人間性がどれほど重要であるかは改めて言うまでもないところである。

ただし、その問題と、学習意欲が乏しいこととは別に考えなくてはならない。残念なことに、保育科学生の多くは、小中学校で身につけておくべき基本的な知識の習得が十分でないだけでなく、学習意欲も少ない場合が多いことも否定できないのである。

(2) 指導者の問題

さて「国語表現」の問題で考えてみよう。なぜ正しい文章の書き方が身につけていないのであろうか。その原因は、学生が勉強しなかったというだけでなく、大学に入学するまでの教育方法にも問題が潜んでいるように感じられる。たとえば、作文指導についてである。現在の小学校や中学校では作文を書くことはそれほど多くはないようであるが、仮に作文という時間が設けられていなくても、国語の時間に作文を書くことや国語以外の教科でもレポート提出はあるだろう。

ところが、作文を提出しても、誤字や当て字を指摘したり添削したりして返却する教員が少ないことが学生に対するアンケート調査から明らかになった^(註12)。小中学校時代に作文やレポートを提出した際に、その内容はもちろんであるが、文章表現の間違いを指摘されたり添削してもらったりした経験のある学生は2割ほどしか見られなかったのである。

多くの学生は、「作文やレポートには先生の印や花丸しかついていなかった」と話している。個別に指導（指摘・添削）してもらった経験は決して多くないのである。このことに関しては、教師が多忙という指摘がなされていることも無関係でな

いだろうが^(註13)、これでは間違っ覚えてしまった児童・生徒にそれを気づかせることは難しいであろう。学生の作文を添削していて小学校や中学校で習う漢字の間違いを指摘すると、多くの学生が「これが間違っているのですか」「今まで先生から間違いと言われたことがありませんでした」という反応を示す。

たとえば、「発達」の「達」の「つくり」を「幸」と書くものと思こんでいる学生が少なくない。また、「おもいのほか」という意味の「意外」を「以外」と書く学生も多く、そのことを指摘すると、いずれも「これまで先生から指摘されたことがなかったので間違っているとは思っていませんでした」と、異口同音に反応する。

小中学校でいわゆる「成績のよい」児童・生徒は自分で間違いに気づいたり正しい漢字を学習したりすることができるであろうが、現状では、保育科に入学する学生はそこまで達していない場合が少なくないのかもしれない。

義務教育の現場がどのようになっているかは知ることができないが、これでは間違っ覚えていた児童・生徒に気づかせることは難しい。問題なのは、成績上位の児童・生徒は自分で正しい漢字を覚えることができるかもしれないが、中レベル以下の児童・生徒の間違が多いことが想像されるため、担任補助を付ける等、その対応をどうするかであろう。現在の日本は格差社会と言われるようになってきたが、学校間の格差だけでなく、学校内での学力差も拡大しているのではないだろうか。

5. 授業での対応とその結果

こうした現状をふまえ、「国語表現演習」では、毎週テーマを決めて学生に課題文を書いてもらい、それを添削して返却することになっている。ただし、あまり分量が多いと負担になる（書く方にも読む方にも）ので1回の字数は400字とし、自宅で書いて授業の初めに提出してもらおう。翌週には訂正箇所を赤ペンでチェックして返却する。特に

問題のない作文には○をつけて返す。

チェックされた部分は学生が自分で書き直す。チェックされた理由や訂正の仕方がわからない場合は、授業時間外に質問するように伝えてある。もちろん、学生がチェック箇所を確実に訂正したかどうかを確認するために、学期末にすべての文章をまとめて再提出することも義務づけた。

一方、授業では、多くの学生が共通して間違っている表現などを取り上げて正しい書き方を説明している。これを半期の授業中、毎週くり返していると、多くの学生の文章は確実に変わってくる。さらに、予想外のこととして、学生の意識も変化してきたのである。

次に紹介するのは、最終回のテーマ「国語表現演習の授業を受けた感想」の一部分である。

- * 今までこのような添削をしてもらったことはありませんでした。しかし、今回の指導を受けて自分の間違いや癖がわかり、勉強になりました。
- * この半年間、毎週小論文の課題が出ました。最初は「嫌だなあ」という気持ちでしたが、今では、自分の「くせ」に気づき、文章構成をする勉強になったので、よかったと思っています。
- * 中学や高校では、作文を添削してもらったことがほとんどありませんでした。文章を書くことはあっても、間違っているところを指摘されていなかったもので、ほとんど勉強になっていなかったのです。そのように過ごしてきた私にとって、この授業は大変でしたが、新鮮さもありました。自分の書き方が正しいと思っていたので、たくさん直された作文が戻ってきたときは愕然としました。しかし、毎回のよう添削してもらおううちに、自分の間違いや癖がわかって、文章がよくなりました。また、わかりやすい文章を書こうという気持ちにもなってきました。

* 私が書いた文章は文末がいつも同じような表現でした。しかし、それではよい文章とは言えないということで、文末の表現に変化をつけるようにしました。すると、文章がおもしろく感じられるようになりました。先生に添削してもらった作文は、読みやすく伝わりやすい文章になっていました。

* 作文を書いて終わるのではなく、その後に先生からの添削指導を受けたことで、自分でも表現の仕方や言葉に気をつけるようになりました。添削指導が入ることにより、人に読まれるという意識が高まります。そのような意識が高まると、自分の言葉や文章が読み手に伝わるかどうかを考えながら書くようになるのです。

* 私は添削指導を受けて、文を書くということに対する気持ちが変わりました。以前は、自分の気持ちをそのまま表現していました。そうすることによって、読んでいる人にも伝わると思っていたのです。しかし、その考えは間違っていました。自分の気持ちのままに文を構成していると、読む人にとって非常に理解しにくい文章になってしまうのです。先生に指摘していただいたところを自分なりに解釈して訂正していくことで、それらの悪いくせに気づき、直すことができるようになりました。自分の文章の思いこみに気づいたことで、文を書くときはまず、どうしたら相手に読みやすく理解しやすい文になるのかということを考える必要があると意識するようになりました。そして、このことは文を書くこと以外でも同じだと思いました。

* 戻ってくる作文が増えるたびに、「このままではいけない」「正しい日本語を身につけてから4月を迎えたい」と思うようになりました。添削指導を受けたことは、私自身が書く文章や話す言葉を見直し、改善しようと思うきっかけになりました。

* 私は最初、毎週作文を書くのはとても大変で面倒なことだと思っていました。書いても書いてもすぐに次の課題が出され、なぜこのような辛い思いをしなければならないのかと思うこともよくありました。しかし、文章を書く練習をしているうちに自分の気持ちが変わっていくのがわかりました。わからない漢字や言葉を調べることが多くなり、学ぼうとする意欲が増したのです。すると、徐々に言葉のつかいかたもわかるようになりました。

* 自分が書いた文章を先生がすべて直してくれるというのはとてもうれしいことです。文章を一生懸命に書いても、「見ました」という意味の判が押してあるだけでは、「この先生、こんなに自分が一生懸命に書いたのに、読んでくれたのかな」と疑問に思います。でも、先生は、すべてに目を通してくださり、手書きで直してくださいました。私の課題文はいつも赤ペンの直しばかりで、○がつくことはありませんでした。しかし、毎週の積み重ねが力になったのか、最後の課題でひとつだけ○をもらうことができました。本当にうれしくて、苦手な私でも頑張れば○がもらえるようになるのだと思いました。

* 気がつけば、もう14枚もの作文を書いてきました。初めは面倒くさくて、仕方なく書いていました。毎週のように書いて意味があるのか、といつも疑問に思っていました。しかし、書いていくうちに、次第に私の中で変化が見られるようになりました。私は昔から作文が得意だったので、簡単に書けるだろうと自信を持っていたのです。しかし、最初に戻ってきた作文は赤ペンだらけでした。次に返されたものも、その次も赤ペンだらけで、思い悩みました。そこで、それまでの作文を読み直すと、漢字の間違いやカギ括弧を書く場所など、すべて基本的なところを間違っていたのです。それまで自信を持っていた自分をとて

も恥ずかしいと思いました。それからは、作文を書くときは真剣な気持ちになりました。漢字がわからないときは必ず辞書で調べようになり、書き方がわからないときは教科書を読み返すようになりました。そうしたところ、赤ペンが減り、○がつく作文が増えてきました。次第に文章を書くコツがわかり始め、書くことが楽しくなったのです。

- * 私は小中高の時に、先生に作文の添削をしてもらった記憶がありません。ですから、今まで自分が書く文章の表現に疑問を持つことがあっても、直すこともせずにここまでできてしまいました。今回、添削指導を受けて、今までわからなかった自分の表現の間違いに気づくことができました。
- * 小学校・中学校で作文を書いても添削指導をされたことはなく、漢字の間違いを指摘されるだけでした。ですから、自分が書いた文章がおかしいと思ったことはありませんでした。毎週課題が出されるので、作文を書くのが嫌になってしまうと思っていましたが、次の週には必ず先生が添削をした作文が戻ってくるので、楽しみにになりました。
- * 毎週出される課題は作文嫌いの私に重くのしかかって、日曜日が苦痛でした。どうして先生が厳しく添削するのかをまるで理解していませんでした。先生は最後の授業で「学生に嫌われても作文指導は続けようと思った」とおっしゃいました。それが「学生のため」ともおっしゃっていました。私はとても驚きました。そこまで考えてくれたとは知りませんでした。今考えると、作文を書いて本当によかったと思います。

最終課題の作文から一部分を紹介したが、期待した以上に学生がこの課題を真面目に受けとめてくれたことに驚いている。もちろん、課題文という性格上、学生の手書いている感想を額面どおりに

受けとめてよいか疑問がないわけではない。それは、少しでも良い点数がほしいために社交辞令的な文章があるかもしれないからである。しかし、ここでは特に授業を高く評価してくれた学生の文章を選んで紹介したわけではない。

6. 新たな対応の必要性

こうした結果が出ると同時に、そこには基礎的な学力が十分でなく学習意欲も高くない小中高校生に対する指導のあり方の課題も見えているように思える。このことに関して、群馬県立女子大学の富岡賢治学長は「基礎学力の低下が問題になっている現在、求められるのは『丁寧な教育』であろう」と述べている^(註14)。

このことは文章表現だけでなく、どの教科にも共通していると思われる。それは、個別に丁寧に指導することが重要だという点である。そのことは、先に紹介した学生の感想文の次のような部分からも明らかである。

今回、添削指導を受けて自分の間違いや癖がわかり、勉強になりました。

毎回のように添削してもらううちに、自分の間違いや癖がわかって、文章がよくなっていました。

最初に戻ってきた作文は赤ペンだらけでした。

次に返されたものも、その次も赤ペンだらけで、思い悩みました。そこで、今までの作文を読み直すと、漢字の間違いやカギ括弧を書く場所など、すべて基本的なところを間違っていました。

私は小中高の時、先生に作文の添削をしてもらった覚えがありません。ですから、今まで自分が書く文章の表現に疑問を持つことがあっても、直すことなくここまでできてしまいました。今回、添削指導を受けて今までわからなかった自分の表現の間違いに気づくことができました。

小学校・中学校で作文を書いても添削指導をされたことはなく、漢字の間違いを指摘されるだけでした。ですから、自分が書いた文章はおかしくないのだと思っていました。

ただし、これですべてが解決というわけではない。この方法でも限界があった。それは、学習意欲のさらに低い学生にどのように対応するかである。保育科の授業は原則的に50人程度のクラス単位（全5クラス）で行っているが、各クラスに1割ほどこうした方法でも学習意欲の高まりが見られない学生が存在したことである。作文が書けないためであろうか、授業の出席率が悪かったり、催促しても課題文の提出が遅れがちだったりする学生が数人ずつ見られた。そうした学生に共通する点として、「遅刻や欠席が多い」「挨拶や返事ができない」といった基本的な礼儀作法や生活習慣の問題があるように感じられる。

また、このことは「国語表現演習」の授業だけでなく、他の教科でも欠席や遅刻が目立ち、レポートや事務的な提出物が期限に遅れる場合が少なくないのである。

7. 生活習慣と学習習慣との関連

人間の心性として、やりたくないことからできるだけ目をそらせたり遠ざかったりしようとするものである。学習意欲がわかenないと授業に出席したくなくなるから、遅刻や欠席が目立つことは当然かもしれない。それでも入学を許可した以上、何とか大学で求めるレベルに達するように教育しなくてはならない。そのために、大学の授業をどのように展開するかが問題になっているのであるが、授業内容の検討や講義の進め方といった「大学」側の問題だけを議論していてももはや問題は解決しない段階に来ているように思われる。

このことに関連して、以前の「成績と生活習慣の関連」についての調査によると、再試験を受けた学生は遅刻や欠席が多いのに対して、受けない

学生はきわめて少ないことがわかった^(#15)。

さらに、「基本的生活習慣と学力テストの成績がきわめてクリアな相関を示している」ことを荻谷剛彦東大教授の調査が示している^(#16)。

最近の小学校では「早寝早起き朝ごはん」がスローガンになっている。これは、生活習慣と学習習慣は相関しており、特に低学年ほど相関性があるのではないかとの考えからである^(#17)。

ところが、低学年にかぎらず中学生でも高校生でも生活習慣と学習習慣には関連があることが指摘されている。東京大学大学院の市川伸一教授は「自学自習力の育成」として「生徒の自学自習力を根本から伸ばすには、学習指導を改善するだけでは不十分と言える」として、高校生においても生活指導が必要であると主張して次のように述べている。

自学自習に向かう生徒は生活習慣が確立している。この点を再確認することがまず求められる。現在、多くの学校は遅刻指導、服装指導といった形で生活指導を実践しているが、そうした活動は、単に生徒の品位向上のためにだけ行われているのではない。むしろ、生徒に自らの生活を正す力＝自律力を身につけさせるためにこそ行われているのではないだろうか。

生徒が自律した学習者となるためには、「自分で立てた学習計画をきちんと実行する」「目標実現のために何をすべきかを判断する」といった形での自律力の発揮が不可欠となる。学習指導と生活指導が表裏一体の関係にあることの意義を、改めて確認する必要がある^(#18)。

この主張は非常に興味深いものである。そこで、このような視点に立って改めて保育科の学生を見直すと、

- ①勉強しなくてはならないと考えてはいるものの、実際にはしていない学生が少なくない。
- ②授業の前後にはしっかりと挨拶をしようと約束をしておいても、実行できない。授業時間に遅れてきたり期限までに課題を提出できない

かったりする学生が多い。

- ③授業中の姿勢が悪い。中には「立て膝」の学生もいる。型ができていないのである。
- ④冬期の授業では、教室でオーバーやマフラーや帽子を着けたままの学生が少なくない。
- ⑤それほど長い時間ではないのに、教師が説明をしている時に静かに聞くことのできない学生が多い。特にここ数年は授業中の態度に問題が見られるようになり、私語が多いという指摘が増えている。

市川教授が指摘しているように「自らの生活を正す力」が身につけていない学生が少なくないのである。

こうした現状に対して、高校において生活指導を長く担当した経験を持つ天理大学講師の原田隆史氏は、教職志望の学生に対する「自立型人間」育成の基本として、次のような取り組みを紹介している。

相手が大学生であっても、基本は態度教育です。と言っても、私語をしている学生や遅刻をしてくる学生をやみくもに怒鳴りつけるだけではだめです。真面目に、素直に、一生懸命に人の話を聞くことが、教師を志す人間にとっていかに大事か、今学校現場で起こっていること、生徒の態度の乱れ、学校の荒れの現状、を紹介しながら指導力を身につけることの重要性を説いていく。

さらに言葉で伝えると同時に、文章にして目で見せる。筋道立てて説明していくと、皆が私の話を真剣に聞くようになります。主体変容……自分が変わるから相手も変わる、先生が変われるから生徒が変われる……ということに学生が気付くわけです。

次に例えば「講義の5分前になったら、ゴミを拾おう」と呼びかけます。清潔な環境で勉強することが現場の教師にとっていかに重要かを科学的に説明する。

そうすると次の授業では、すべての学生が5分前にゴミを拾って着席し、落ち着いて授業を受けるようになります。皆良い姿勢で90分の講義を聞いて、感想文などの提出物も今まで以上にしっかり出すようになる。

そうなると、今までは私の雰囲気で作られていたものが、「文化」になります。「文化」になったら、今度は人に伝わっていくので、態度教育の手間はさらに減っていきます。そして最後は「常識」になる。これが正攻法の生活指導だと思っています。

ところが、先生方の多くは、このように手間と時間を掛けた生活指導をしないで「今の生徒はだめだ」と嘆いている。「主体変容」という教育の根本原則を、教える先生自身が分かっていないんです。と持論を展開している^(#19)。

8. ま と め (今後に向けて)

すでに見てきたように、大学全入時代といわれる現在は、これまでのような学習指導では対応しきれない「大学生」が大量に誕生している。そのため、授業内容の検討や教授法という一面にだけでは解決できない問題が発生してくるのである。

[深刻な大学生の学力低下 教員の6割問題視＝ベネッセ教育研究開発センター2005年12月1日]

[悩む教授 嘆く親＝読売新聞2005年3月15日]

[大丈夫か日本語 大学なのに中学生レベル6割＝SANKEI WEB]

このように考えてくると、私たちに必要なものは「生きるための基礎学力」と言うことではないだろうか^(#20)。

毎日新聞によると、ベネッセ教育研究開発センターが実施した「学習基本調査 国際6都市調査」で、東京の小学生はソウル・北京・ヘルシンキ・ロンドン・ワシントンと比べて、学ぶことにあま

り意味を見出していない傾向が浮き彫りになった」という^(注21)。これは小学生を対象にした調査であるが、大学生についても同じことが言えると考えられる。机上の知識を詰めこむのではなく、日々の生活に結びついた物事を考えて処理する力を養うための学習ならば、今よりは学習意欲も向上するのではないだろうか。

すでに、そうした現状に対する取り組みも始まっている。例えば、平成18年度に保育科を開設した京都市の光華女子大短大部では「生活上の基礎技能」という必修科目を取り入れて、いわゆる「生活力」を養うための試みを実施している。雑巾の絞り方からほうきの使い方・箸のもち方といった基本的な生活習慣から返事や挨拶等の礼儀作法を大学の授業でしっかりと教えようというのである^(注22)。

最近「保育者のマナー」に関するテキストが何種類も発行されるようになったが^(注23)、これも学生の実態を反映しているであろう。これがすべての大学生に必要なかどうかは議論のあるところであろうが、少なくとも保育科においては意味のある取り組みではないだろうか。いずれにしても、こうした取り組みを大学で行わなければならない状況になっていることは間違いない^(注24)。

しかし、こうしたことをすべて取り入れることは不可能である。それは、大学には大学に求められる学習内容があるからで、大学で対応できることの限界を超えていると言わざるを得ない。そうだとすると、小中高校と連携して、それぞれの段階で「自立(律)できる人間」を育てるための学習内容(もちろん生活指導を含めた)を検討しなければならない。

同時に、学校にすべてを求めることにも無理があるから家庭への働きかけも必要になってくる。本来、基本的な生活習慣や礼儀作法は家庭で教育すべき問題のはずである。

また、小中高校までを含めた教育内容の検討には、学習指導要領の改訂を伴うことから相当な時

間がかかるであろう。とはいうものの、ことここに至っては、できることから取り組まなくてはならない。いずれにしても、基本的な生活習慣を確立することが学習習慣の確立にも影響していることは確かなのであるから、大学教育においても今後の学習指導は生活指導との関連をもたせながらの取り組みが重要であることは間違いないと言えるであろう。

(注1) 文科省のコメントでも基本的な生活習慣との関連に言及している。ただし、「このテストが示す学力は〈特定の一部〉にしかすぎない。それなのに、文部科学省は同時に実施した生活習慣や意識の調査結果と組み合わせ、〈宿題をする〉〈規則を守る〉といった子どもは〈正答率が高い〉と“理想の子ども像”を描いて見せた。現場の教師が子どもを理想の型に当てはめようと腐心し、向かい合う子ども一人一人の姿が見えなくなるとは本末転倒だ」とその見解に対する反論も出されている。

(注2) このことは読売新聞でも「大学生の生活指導どこまで」という記事で指摘している。

「えり好みしなければ、誰でも大学に入れる『大学全入時代』の到来を控え、勉強以前の社会常識や生活態度まで学生に指導する大学が出始めている。あいさつの仕方を教える大学もあれば、出欠状況を管理する所も。未熟な学生をそのまま社会に送り出せば、大学の評価も下がるだけに、中高生に接するような手取り足取りの指導を行う必要に迫られていると言えそうだ」として、埼玉県で毎朝、教員3～4人が校舎の入り口付近に立ち、登校する学生に、「おはよう。ちゃんと勉強しているか」などと声をかけていると報告している大学を紹介している。この大学では、さらに「あいさつで日本一」「服装・身だしなみで日本一」といった標語がキャンパスの各所に掲げられているようで、まさに小中学校なみである。こうした取り組みは国立大学でも同様で、入学式後の5日間、新入生が学生食堂で教職員や先輩学生と食事をする朝食会を開き、新入生に無量の朝食券を配って、1時限目からきちんと授業に出る習慣をつけさせているそうである。別の大学では、新入生の必修授業として「大学・社会生活論」を開講し、ノートの取り方だけでなく、ゴミの分別の仕方や交通標識の見方まで教えているという信じられないような現実が紹介されている。

(注3) このことは保育科にかぎったことではなく、多くの大学生についても同様の問題が指摘されている。

(注4) 拙稿「保育科学生の文章表現力について」(『育英短期大学研究紀要第19号』所収 2002年2月)

(注5) この事例については、「私が思ったことは、……と 思いました」という形の文章が多いことで、一般的な主語と述語が対応していない②の場合と区別して取り上げた。具体的な文章例については、拙稿「文章表現から見た保育科学生の問題点—表現の特徴と思考力の関係—」(『育英短期大学研究紀要第23号』(2006年2月)参照。

(注6) 拙稿「文章表現から見た保育科学生の問題点—表現の特徴と思考力の関係—」(『育英短期大学研究紀要第23号』所収 2006年2月)

推量表現を用いないことに関連して、精神科医で帝塚山学院大学教授の香山リカ氏は「抽象的な思考力失う若者の具体病」と題して「具体的な名詞や情報のみで会話が進むことの心地よさから抜け出せなくなり、物事を抽象的に考える力が失われてしまう」と指摘している(読売新聞 1998年4月27日)。

(注7) 大学生に限らず、日本人全体が幼児化しているとの指摘もある。たとえば、マークス寿子『日本はなぜここまで壊れたのか』(草思社 2006年10月)、榎原英資『幼児化する日本』(東洋経済 2007年7月)、香山リカ『なぜ日本人は劣化したか』(講談社 2007年4月)等でもそのことが指摘されている。さらに、全入時代の大学生の実態については石渡嶺司『最高学府はバカだらけ』(光文社 2007年9月)参照。

(注8) 特集「ニッポンの教育」第1部 機能不全の実相②。(日経新聞:2006年12月5日)

(注9) 日経新聞(2006年12月5日)

これに関連して、高校が「教育機関ではなくサービス機関となりつつある」と指摘するのは、公立高校で生徒指導部長をつとめる喜入克氏である。同氏著『高校の現実』(草思社 2007年3月)参照。

(注10) 上毛新聞(2007年9月23日)

高校生の学習態度については、財団法人・日本青少年研究所から「高校生の意欲に関する調査」が発表されている(2007年4月)。

(注11) 日本人の横並び意識については、イザヤベンダサン『日本人とユダヤ人』(山本書店 1970年5月)に興味深い見解が示されている。

(注12) 拙稿「文章表現から見た保育科学生の問題点」(『育

英短大研究紀要第23号』2006年2月)参照。

(注13) 最近は小中学校教諭の雑務が多く、児童・生徒とじっくり向きあえないことがさまざまところで指摘されている。

〈教員:公立小中高で1日2時間残業 文科省が勤務実態調査=毎日新聞 2007年5月23日〉

〈教員9割超に多忙感:松江教育センター調査結果=山陰中央日報 2007年6月8日〉

〈教育ルネッサンス:先生はなぜ忙しいのか=事務集中する教務主任・進路指導 データ処理膨大・授業に部活 休憩取れず・多用な校務 負担に偏り・非効率生む事務細分化・過度な責任 心の病も・心のケア 養護教諭が奮闘・大量の文書 指導時間奪う=読売新聞 2006年11月21日から6回連載〉

(注14) 富岡「子どもの意欲格差」(読売新聞・群馬版 2007年6月22日) このことに関連して富岡・他著『勉強力を引き出す30のヒント』(小学館 2003年9月)には、国立教育政策研究所が行った「学習意欲に関する調査研究」にもとづいて、努力する気の乏しい日本の子どもたちの実態と「やる気にさせる」ための働きかけ方についての提言が記されている。

(注15) 拙稿「保育科学生の家庭生活の実態について(その2)」(『育英短期大学研究紀要第7号』(1989年7月)

(注16) 苅谷「学力低下を追う(下)」(『世界』2006年5月号 岩波書店)

(注17) 文科省が運動〈早寝早起き朝ご飯〉:(読売新聞 2006年6月2日)

園児に早寝 半年で効果(読売新聞 2005年4月29日)

親の夜更かし子に影響(読売新聞 2005年4月30日)

(注18) 『VIEW21』(ベネッセ教育研究開発センター 2004年4月号)

(注19) 『VIEW21 高校版』(2004年4月号)

(注20) シリーズ「学力を追う」(読売新聞 2003年6月12日) 同じ指摘は岸本裕史『見える学力見えない学力』(大月書店 2007年2月)にも見られる。

(注21) 「勉強:なんのため?東京の子、意義見いだせず」(毎日新聞 2007年9月23日) 豊かすぎる社会の中で、「生きる」目的や意味を見出せない若者が増えているのではないだろうか。内田樹『下流志向』(講談社 2007年1月)には、「学ばない子どもたち、働かない若者たち」の事例が数多く紹介されている。

(注22) 「生活力をつけるための取り組み事例」(『全国保育

士養成協議会第45回研究大会発表論文集』2006年9月・190ページ)

(注23) 手元にある『保育者のためのマナー演習』(河村・水谷・明瀬共著 三恵社 2007年2月)には、マナーの基礎として、言葉づかいはもとより、挨拶や返事のしかた・正しい姿勢やお辞儀のしかたに至るまで、詳細に説明されている。たとえば、挨拶については、朝の挨拶・でかけるときの挨拶・園に戻ったときの挨拶・退勤時の挨拶・廊下ですれ違うときの挨拶・他の部屋を訪ねるときの挨拶という具合である。

(注24) このような現状について社会学者の上野千鶴子氏(東京大学教授)は、「東大の教師をつとめて12年、そのあいだにも学生は確実に変わってきた。ひとことで言って、幼児化と言ってよい」と述べている(『大学生の生活指導?』=『生活指導』2007年9月号 明治図書)。

さらに、読売新聞では「大学の生活指導どこまで」というタイトルで、大学全入時代の到来を控え、勉強以前の社会常識や生活態度まで学生に指導する大学が出始めていることを指摘している(2007年11月9日)。

(2007年10月26日 受付)
(2007年11月27日 受理)